

トヨタ財団 2025 国内助成プログラム「2）地域における自治を推進するための基盤づくり」

ものづくりを原点とし 暮らしを創り学び合う 共創型自治モデルの構築

代表者：岡本誠

団体名：くらしのデザインラボ

期間：2年間

<https://toyotafound.my.salesforce-sites.com/psearch/JoseiDetail?name=D25-L-0097>

企画・概要

プロジェクトは、北海道函館市西部地区を舞台に、「ものづくり」を原点とし、市民が主体となって暮らしを創り学び合う“共創型の自治モデル”の構築をめざす。特に重視することは、自由な創造を尊重し楽しむことである。

この地域は、歴史的・文化的遺産や造船・水産などの産業技術があり、多様な人的・物的資源に恵まれている。しかし、少子高齢化や産業の衰退、情報技術の知識や能力の格差等の課題がある。こうした「新常态」の中で、申請者らは「ものづくり」中心の活動を通じて、創ることと学ぶことを繰り返し住民自らが地域の暮らしを再構築する力を育てたいと考えた。地域そのものを、子どもから大人までが参加できる“共創の学校”と捉え、自治のかたちを固定せず、関係者みんなで問い、実践し、更新し続けることをめざす。

助成期間中はその試みのための“土台”をつくる期間であり、以下の視点を重視する。①自由な創造を尊重し楽しむこと、②実践を通じて相互に学ぶこと、③教育現場と地域が交わること、④技術や表現手法を身につけ、共有すること。

こうした価値が浸透すれば、自治の基盤は自然と地域に根づき、財源の有無や活動の規模に左右されない継続力を持ち始めると考える。

■参加メンバ

約 30 名（職業・年齢多様）

■推進・支援団体：函館工作座、くら cra 合同会社、NPO スマートシティはこだて、学生団体 ISARIBI with、生きる空きプロジェクト、北海道函館西高等学校、公立はこだて未来大学、札幌市立大学、市立函館博物館、函館市役所都市建設部、国立函館視力障害センターなど

目的・背景・経緯

目的

函館市西部地区を舞台に、「ものづくり」を原点とし、市民が主体となって暮らしを創り学び合う“共創型の自治モデル”の構築をめざす。

背景

- ・歴史的・文化的遺産や造船・水産などの産業技術が埋もれている
- ・少子高齢化、人口減少、産業衰退、情報技術の能力格差 > 魅力創造

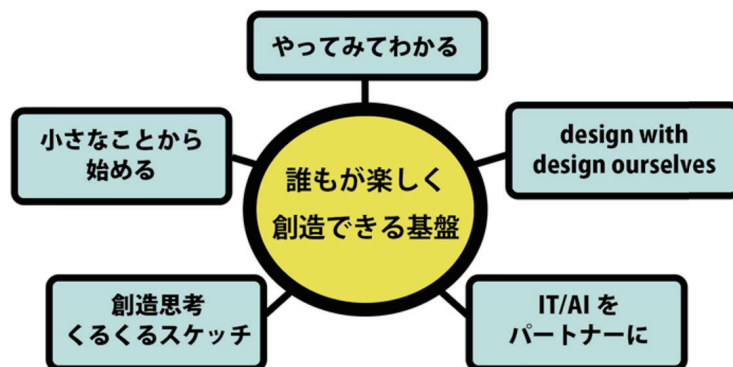
経緯

西部地区再整備事業基本方針「市民、企業らと行政が連携・協力し、それぞれが主体的に事業に関わりを持つ共創の視点を取り入れること」

- ・しかし、自治の実現において主体性を育むことや創造の楽しさを共有することの難しさを実感した
- ・函館工作座設立、市立函館博物館などのデザイン支援など

アピールポイント

地域そのものを、皆が参加できる“共創の学校”と捉え、自治のかたちを固定せず、関係者みんなで問い、実践し、更新し続ける。



知行合一

「自分も創っていい」「創ることは楽しい」と実感できる創造的自治基盤を、地域に根づかせたい

A

街の道具とぶらぶら歩き

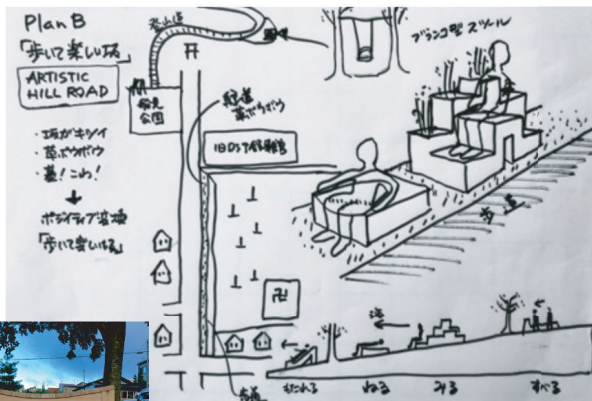
居心地のよい町の実感、住民によるデザイン経験の蓄積、「自分たちでまちを整える」ことへの参加意識と誇りの醸成

A 問題解決でなく魅力創造
ものだけでなく物語を生む

A1 坂道プロジェクト 2

A2 夕日を楽しむ

A3 環境循環と暮らし etc.



みんなで作る博物館

B

展示企画等を市民と共に行う「共創的な博物館」
与えられる場から創る場へ

博物館収蔵資料 (モノ、説明文)



暮らし展示 (体験型展示、中に入って休憩しながら歴史を体感する)



デジタルアーカイブとのリンク
時代を辿る仮想空間



B 市民の目線で函館の宝 (博物館) を編集する

B1 古道具や古材を用いたサイン

B2 街中博物館ショーウィンドウ

B3 市民と作る一部屋ミュージアム (暮らし展示)

B4 ヘレンケラー：触って見ることの展覧会 etc.

楽しく創造に加われる環境づくり

1. 高校・大学&地域 (海外) 連携
 2. 勉強会 (匠、デンマーク、台湾)
 3. AI とまちづくり
 4. ノウハウの蓄積
- etc.

共創の基盤づくり

C

スケッチ・AI・探求の時間

くるくるスケッチ

スケッチを介した思考法
他者の視点を学びアイデアが成長する

